

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2023

課題番号：17K04706

研究課題名（和文）現代日本におけるペアレントクラシーに関する追跡・発展的研究

研究課題名（英文）A Tracing and Developing Study on Parentocracy in Contemporary Japanese Society.

研究代表者

望月 由起（MOCHIZUKI, Yuki）

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：50377115

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：研究開始当初、本研究では、現代の日本社会におけるペアレントクラシーの実態について、これまで取り組んできた研究調査を追跡するとともに、新たな視点（「高校受験」「海外進学」「スポーツ活動」「芸術活動」等）からも捉えることによって、明らかにすることを目的としていた。本研究の期間内に、本研究に関連する「文献、観察、聞き取り等による情報の収集」「多様な調査（予備的な調査を含む）の設計や試行」「既存の調査データ等の分析」等をすすめることができた。しかし新型コロナウイルス感染症の拡大や私自身の体調不良等によって、研究期間内に十分な研究成果を体系的に示すことはできなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、現代の日本社会におけるペアレントクラシーの実態としてさまざまな側面に目を向け、「我が子に対する学歴期待と親自身の大学での学び経験等との関連性」や「日本のプロサッカー選手のジュニア期の経歴」等に関する分析は、研究成果として示すことができた。しかし新型コロナウイルス感染症の拡大や私自身の体調不良等のため、研究開始当初に予定していた調査等を期間内に実施し、研究成果として体系的にまとめることはかなわず、学術的意義や社会的意義を十分に果たすことができなかった。今後、本研究の期間内に収集した情報や試行した調査の結果等をまとめて、学術的意義や社会的意義を果たせる研究成果につなげていきたい。

研究成果の概要（英文）：At the outset of this study, the aim was to identify the reality of parentocracy in contemporary Japanese society by tracing my previous research and by investigating it from new perspectives ('high school entrance exams', 'study abroad', 'sports activities', 'artistic activities', etc.). Within the timeframe of this study, I was able to 'collect information through literature, observation and interviews', 'design and pilot a variety of surveys (including preliminary surveys)' and 'analyze existing survey data'. However, due to the proliferation of COVID-19, poor health, and other factors, it was not possible to systematically demonstrate sufficient results within the timeframe of this study.

研究分野：社会科学

キーワード：教育社会学 ペアレントクラシー キャリアデザイン 学歴期待 スポーツキャリア

1. 研究開始当初の背景

我が子にできるだけ良い教育環境(安全、学力、情操、将来の進路等)を与えたいというのは、多くの親の願いであろう。近年の日本の社会状況の中で、教育の営みという文化領域はますます重要な位置を占めている。多くの社会移動・階層研究がこれまで示してきたように、教育は人々の社会経済的地位を左右する有力な社会移動の手段ないし機会とみなされているが、幼児教育から各学校段階、高等教育までの諸教育機関の今日的なあり方は、久富(2007)が指摘するように、そこでの算出を通して、家族・地域間の格差の広がりを再生産する働きをしている。

望月(2011)は小学校受験の拡がりを実証的に明らかにし、その背景に教育問題や家庭問題、社会問題にいたる深い問題が潜んでいることを指摘している。かねてより、子どもの進路に対する親の階層(社会的地位)の規定力の大きさは多々指摘されてきたが、家庭の経済状況が子どもの進路を規定する力は増大しており、「ペアレントクラシー社会」として日本社会を捉え、さらなる階層化・格差社会化へと繋がる可能性を指摘する議論も活発になされている。

Brown(訳書2005)によれば、市場化された社会における教育的選抜は、本人の能力や努力といった「業績」よりも、親の富や願望といった「ペアレントクラシー」に基づくものへと変質する。耳塚(2007)によれば、親の富(学校外教育費支出、世帯所得)と願望(学歴期待)が子どもの学力を規定するという意味で、日本社会もまたペアレントクラシーへの道を行っているといる。受験やその準備教育が低年齢化するにつれ、親の富の大きさが問われ、親の願望や動機づけが大きな影響力をもつ。ペアレントクラシー社会では、藤田(2006)が指摘するように、多くの保護者は、教育の機会や過程が早くから格差化・差別化されていることを無視できなくなる恐れもある。

これまでペアレントクラシー研究では「我が子の進路を見据え、日本のトップレベルの学歴(学校歴)の獲得に注力する家庭」に主に着目してきたが、近年は、多様な教育活動に早期より注力する家庭の様相も浮かび上がっている。

その一例が、「海外進学」である。「グローバル人材の育成」が推進される中で、海外進学を目指す家庭が増えている。海外進学を視野に入れる中高一貫進学校や塾・予備校もみられるようになり、我が子を海外進学、特に海外名門大学への進学に向けて有利な環境におくために、早期からの選抜や準備教育に注力する家庭が増えていることも予想される。

また、幼少期の「スポーツ活動」や「芸術活動」に注力する家庭も増えている。体育や芸術に関する学科を設置する高等学校や、体育大学や芸術大学進学を目指すコースを設ける予備校のみならず、特定のスポーツ活動や芸術活動に特化し、「その道のプロフェッショナルの育成」を掲げ、早期から選抜を行うクラブやスクールも目立つ。こうした環境に我が子をおくために、より早期からの準備教育に注力する家庭の存在も否めない。

【参考文献】

Brown, Phillip, 1995, 'Cultural capital and social exclusions: some observations on recent trend in education, employment and the labor market', Work, Employment and Society 9, B.S.A. Publishment Ltd., Cambridge University Press (=2005, フィリップ・ブラウン「文化資源と社会的排除」A・Hハルゼー他編、住田正樹他編訳『教育社会学 第三のソリューション』九州大学出版会)

藤田英典, 2006, 『教育改革のゆくえ 格差社会か共生社会か』岩波ブックレット 688.

久富善之, 2007 「特集テーマ<「格差」に挑む>について」『教育社会学研究』第80集, pp5-6.

耳塚寛明, 2007 「小学校学力格差に挑む だれが学力を獲得するのか」『教育社会学研究』第80集, pp23-39.

望月由起, 2011, 『現代日本の私立小学校受験 - ペアレントクラシーによる教育選抜の現状 -』学術出版会.

2. 研究の目的

本研究の開始当初の目的は、私がこれまで取り組んできた科学研究費補助金若手研究B「受験(準備)の低年齢化に対する教育社会学的研究」(課題番号21730666)及び基盤研究C「日本型早期選抜及びその準備教育にみられるペアレントクラシーに関する実証的研究」(同25381124)を追跡するとともに、現代の日本社会にみられるペアレントクラシーの実態について、新たな視点(「高校受験」「海外進学」「スポーツ活動」「芸術活動」等)からも明らかにすることであった。

先の「1. 研究開始当初の背景」でも示したように、従来のペアレントクラシー研究では、「我が子の進路を見据え、日本のトップレベルの学歴(学校歴)の獲得に注力する家庭」に焦点をあててきた。しかし近年の各種調査報告等からは、我が子の多様な教育活動に早期より注力する家庭の様相も浮かび上がっている。

こうした社会状況を鑑み、現代の日本社会にみられるペアレントクラシーの実態についてさまざまな視点や側面から明らかにすることは、学術的にみても教育政策的にみても意義があるものと思われる。

3. 研究の方法

本研究では、開始当初、先の「2. 研究の目的」を達成するために、以下の調査を期間内に設計・実施し、先行研究や関連情報等を積極的に収集しながら、分析や考察をすすめていく予定であった。

- ・調査1：小学校受験を経て国私立小学校・中学校に進学した子どもをもつ家庭に対する調査
- ・調査2：「高校受験」に臨む中学生をもつ家庭の教育戦略やキャリアデザイン等に関する調査
- ・調査3：我が子の「海外進学」「スポーツ活動・芸術活動」に注力する家庭の教育戦略やキャリアデザイン等に関する調査
- ・調査4：「海外進学」を視野に入れる国内の中高一貫進学校や塾・予備校に対する調査
- ・調査5：特定の「スポーツ活動」や「芸術活動」に特化した国内のクラブやスクールに対する調査
- ・調査6：調査4及び調査5に関連する他国の機関に対する観察調査

しかし上記の少なからずの調査が、新型コロナウイルス感染症の拡大、私の勤務大学の転任や体調不良等によって、実施が不可能あるいは困難な状況となった。

そのため、本研究における視点を広げながら、調査の方法や対象等の再検討を行い、上記の調査の代替や補足として、

- ・小学校受験を経験した大学生を対象とした「幼少期からの学習経験や進路選択」に関する調査
- ・外国語系の学部学科等で学ぶ大学生を主たる対象とした「幼少期からの語学学習経験や進路選択」に関する調査
- ・体育系の学部学科等で学ぶ大学生やスポーツ推薦で入学した大学生等を主たる対象とした「幼少期からのスポーツ活動経験や進路選択」に関する調査

等、予備的なものも含めて調査の設計や試行をするとともに、

- ・ベネッセ教育総合研究所による調査（「大学での学びと成長に関するふりかえり調査」）に基づく「我が子に対する学歴期待と親自身の大学での学び経験等との関連性」に関する分析
- ・国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センターによる調査（「キャリア教育に関する総合的研究」）に基づく「高校生のキャリア形成、高等学校におけるキャリア教育の現状」に関する分析
- ・スポーツ雑誌等に掲載されているデータに基づく「プロスポーツ選手のキャリア形成」に関する分析

等、私が関わった既存の調査データや広く一般向けに公表されているデータ等に基づき、本研究に関連するような側面について分析にあたった。

ほか、研究期間全体を通して、家庭の教育戦略、児童生徒のキャリア形成やその環境等、本研究に関連するような情報（文献・観察・聞き取りなどによるもの）を広く収集し、調査の設計、分析、考察等にも活用した。

4. 研究成果

新型コロナウイルス感染症の拡大や私の体調不良等のため、研究期間内に十分な研究成果を体系的に示すことができなかったが、主な研究成果は以下のとおりである。

(1) 我が子に対する学歴期待と親自身の大学での学び経験等との関連性

ベネッセ教育総合研究所による「大学での学びと成長に関するふりかえり調査」に基づき、我が子に対する学歴期待と親自身の大学での学び経験等との関連性について、親の大学時代の充実度・成長実感に着目して分析を行った結果、主に以下の知見が得られた。

・我が子に対する学歴期待

大学卒業以上の学歴期待は「高充実×高成長」群において顕著に高く、同じ「高充実」群でも成長実感に乏しい「高充実×低成長」群とは13.6ポイントもの差が開いている。また、大学卒業以上の学歴を期待していない者は、「高充実」群では成長実感の高低に関わらず3~4%に過ぎないのに対し、「低充実」群では成長実感の高低に関わらず6~7%もいる。この結果から、親が大学を卒業していても、我が子に同等の学歴を期待していない場合には、「自身の大学時代の学びの充実度」が影響している可能性がうかがえる。

・我が子の大学選択で重視すること

大学時代の充実度・成長実感によって「我が子の大学選択で重視すること」に有意差がみられたのは、以下の点である。

まず「興味のある学問分野があること」は、同じ「高充実」群でも成長実感による差異が目立ち、成長実感が高い群の方が7.7ポイントも高い。我が子の大学選択で「在学中の学びに対する興味」を重視する親は、大学時代の学びの充実度が高く、かつ、成長実感ももっている傾向にあることがうかがえる。また、「資格や免許が取得できること」は同じ「低成長」群でも充実度による差異がみられ、充実度が高い群の方が4.7ポイント高い。我が子の大学選択で「卒業後のキャリアの専門性」を重視する親は、大学時代の成長実感が低くとも、学びの充実を感じている傾向にあるものと思われる。

その一方で「経済的な負担が少ないこと」「偏差値が高いこと」は、成長実感というよりも充実度による差異が目立つことから（いずれも充実度が低い群の方が重視）、我が子の大学選択では「入学時の偏差値や経済負担」を重視する親は、大学時代の成長実感の高低に関わらず、学びの充実度が低いと感じている傾向があるといえる。

・大学に対する価値づけ

全体的に、「高充実×高成長」群は大学を高く価値づけていることが明らかである。中でも、「大学で学問に取り組めば、自分の専門性を高めることができる」「大学に行けば社会で活躍するための実力がつく」「大学では一生の付き合いとなる友人関係を築くことができる」は、多重比較検定の結果からも、「高充実×高成長」群が他のいずれの群との間に顕著な有意差が示されている(いずれも $p<.001$)。

その一方で、分散分析では有意差が示されていても、多重比較検定では「高充実×高成長」群との有意差が示されない場合もある。例えば「社会的に名の通った大学を卒業すれば、将来は安心だ」は、「高充実×低成長」群との有意差が示されていない。「大学で過ごすことは人生経験として貴重だ」は、「低充実×高成長」群との有意差が示されていない。これらの結果からは、「成長実感の高低に関わらず、大学時代の学びの充実度の高い親は高学校歴に対する安心感がある」「学びの充実度の高低に関わらず、大学時代の成長実感の高い親は大学を人生経験の場として価値づけている」傾向がうかがえる。

(2) 日本のプロサッカー選手のジュニア期の経歴

2020年度のJリーグ(日本プロサッカーリーグ)登録選手に関する雑誌資料、各チームのホームページ等に掲載されている情報等に基づき、プロサッカー選手のジュニア期の経歴を調査し、主に以下の結果が得られた。

・プロサッカー選手に至る経歴

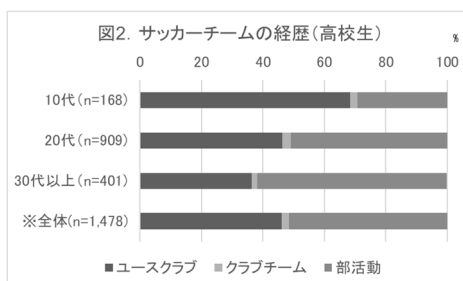
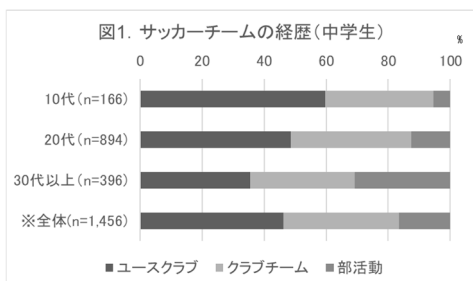
高校卒業後にプロサッカー選手になった選手は50.2%であり、そのうち56.8%は中学生を対象としたJリーグの育成組織であるジュニアユースクラブ出身、63.5%は高校生を対象としたJリーグの育成組織であるユースクラブ出身である。また大学卒業後にプロサッカー選手になった選手は49.8%であり、そのうち35.7%はジュニアユースクラブ出身、28.8%はユースクラブ出身であった。

・中学生や高校生の時期の所属

ジュニアユースクラブに所属していた選手は、全体の46.3%である。選手の世代別にみると、その割合は若年層の方が明らかに高い($\chi^2(4)=89.561, p<.001$) (図1参照)

またユースクラブに所属していた選手は、全体の46.1%である。日本野球機構に登録している日本人プロ野球選手のほぼすべてが、高校生の時期には部活動に所属していたのとは対照的である。世代別にみると、中学生の時期同様、ユースクラブの所属率は若年層の方が明らかに高い($\chi^2(4)=52.502, p<.001$) (図2参照)

なお中学生でも高校生でもJリーグの育成組織に所属していた選手は全体の34.7%おり、10代の選手では53.0%が該当する。また、小学生から所属していた選手も全体の10.3%みられた。



上記以外にも、本研究の期間内に「文献、観察、聞き取り等による情報の収集」「多様な調査(予備調査含む)の設計や試行」「既存の調査の分析」等を実施したので、今後、これらの結果をまとめ、研究成果として示していきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 望月由起
2. 発表標題 Jリーグ登録選手のジュニア期の経歴 - コースクラブのキャリア形成支援の必要性 -
3. 学会等名 日本教育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 望月由起
2. 発表標題 我が子に対する学歴期待と自身の大学での学びに関する一考察
3. 学会等名 日本教育学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 耳塚寛明、中西祐子、上田智子、堀有喜衣、寺崎里水、中島ゆり、諸田裕子、王傑、望月由起、李敏、木村祐子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 212
3. 書名 平等の教育社会学 - 現代教育の診断と処方箋 -	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------